
甘～い恋物語！

アルフォンス

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

甘〜い恋物語！

【Nコード】

N2349A

【作者名】

アルフォンス

【あらすじ】

加藤家は、母親と父親、息子と娘の四人家族。加藤家にとっては幸せな家庭！そんな加藤一家のお話です。

甘〜い恋物語！

第一話

奈輔が十五歳になったある日、奈奈と大輔の声が聞こえてきました。奈輔はそつと、居間を覗いて見ました。

すると、奈奈と大輔が口喧嘩をしていました。それも、そうとうひどい口喧嘩でした。

「お兄ちゃん、何やってるの？」そこへ、奈輔より六つ年下の妹、奈奈子が話しかけました。

「奈奈子、居間に行くな！」奈輔が奈奈子の腕を引っ張りました。「なんで？」

「居間、見てみるよ。すごいことになってるからさ……」奈奈子はそつと、居間を見ました。

「ホントだわ。ねえ、お兄ちゃん。ママとパパの喧嘩を止められないの？」奈奈子が言いました。奈輔は考えました。

「そつだ。あの人に聞こう！」奈輔は急いで、電話へとかけていきました。

奈輔はあの人に電話をかけました。

『はい』電話から、優しい声が聞こえました。

「俺、奈奈と大輔の息子の奈輔です。今、二人が喧嘩しているんですけど、どうすれば止められますか？」奈輔は早口で言いました。

「それからね！」奈奈子は奈輔を脇に押しつけて言いました。

『あなたはどちら様？』

「奈輔お兄ちゃんの妹の奈奈子です。えつと、えつとママとパパがすつごい口喧嘩していて、止められないの。あたしとお兄ちゃんが止めても、止まらなくて。前までは、あんなに仲良かったのに、急に喧嘩しだして……」奈奈子の悲しそうな声に、あの方はこう答えました。

『そつなの……わかった。お母さんに変わってくれる？』奈奈子は居間にかけていき、奈奈を呼びました。

「今、変わりました……って友里恵！」奈奈は驚きのあまり、大声をだしていました。

『久しぶり、ばっちゃん。息子と娘が心配してるじゃない。大輔と仲直りしたらどう？』

友里恵が優しく言いました。

「絶対ヤダ。大輔が悪……」奈奈の顔が青白くなりました。

「わかった！誤るから。それだけは、勘弁して〜！」奈奈は居間に飛び込んで、大輔に誤りました。

「あの。母さんに何言ったんですか？」奈輔がおそるおそる聞きましました。

『のむに頼んで、奈奈と大輔を身体ごとくつつける薬を作ってもらうから！って言ったら、奈奈が誤りにいったの』

「でも、それだけで誤るのかしら」奈奈子が不思議そうに言いました。

『奈奈が中学2年の時、クラスでゲームをしていて遊んでいたの。それで、奈奈と恵太郎って人が罰ゲームになって、のむが調査した魔法の飴で二人が身体ごと、くつついちゃったの。あれは、一ヶ月経たないと離れないのよ。じゃあね！』友里恵はそう言うと、電話をきりました。

「お兄ちゃん。ママの友達ってすごいね！あの魔法使いさんも！」奈奈子が言いました。

「そうだな。奈奈子、いつものお祈りするか？」

「うん！」

『この幸せが永遠に続きますように……』

第一話（後書き）

甘いのかな
などと、思ってます^^;

甘～い恋物語！

第二話

奈奈と大輔の口喧嘩もなくなり、家は幸せとなりました。そんなある日、二人のお客が見えました。

「で。何しに来た？」奈奈の言葉に二人は笑って答えました。

「何って。お前の家庭がどんなものか見に来たんだよ。あと……

「冴末が全部言い終わらないうちに、奈奈がさえぎりました。

「いい。でうせ、新しいマホーの薬が完成したんでしょ」奈奈はため息をついて言いました。

「それもあるんだけど。ばっちゃんの家庭、騒々しいから心配で友里恵がにこやかに言いました。

「どこが？平凡だよ」奈奈はスラツと言いました

「しよつちゆう電話かけてくんのに？」冴末の言葉に奈奈は凶星のようです。

友里恵はにこやかに笑っています。

「あれは勝手に奈輔と奈奈子が！」奈奈はムツとした様子で言いました。

「それから、奈奈と大輔に試してほしいことがあんだけどさ！」

「何？」奈奈はあきれた顔で答えました。

「これ、飲んでくれない」冴末の顔がニヤリと笑っています。奈奈は言われた通り、それを飲みました。

「変化なし。失敗だったね」奈奈はフフッと笑いました。

「どうかな。じゃあ、奈奈に質問。今、大輔のことどう思ってる？」冴末の質問に奈奈は。

「素敵な旦那様！って、何人前でこんなこと言ってるの私！」奈奈の慌てようを見て、二人は笑い出しました。

「効果バツグン！」二人は声を合わせて言いました。

「何これ。勝手に口が動くし、思ったこと全部声にだして言うてるし！」奈奈はびっくりしています。

「それは思ったことを口にだしてしまう薬！俺の第四十八番目の品物！」冴未が胸を貼って言いました。

「四十八番って。私が試したのは……」

「二十六番」冴未はスラリと言いました。

「大輔にも試してね」友里恵が笑いながら言いました。

奈奈はその晩、冴未に貰った魔法薬四十八番を大輔の飲んでいるコ―ヒーにそっと、入れました。

大輔はそうとは知らず、コ―ヒーを飲みました。

「ねえ、質問していい？」奈奈は照れながら言いました。

「何だよ。質問って？」大輔はそっけなく言いました。

「あのね。私のこと好き？」奈奈は顔を赤くしながら聞きました。

「大好きだよ。なんたって俺の奥さんだからな！」大輔は爽やかに言いました。

その言葉に、奈奈はいつそう顔が赤くなりました。大輔も顔が真っ赤です。

「お兄ちゃん、見て。パパとママの顔が真っ赤よ」奈奈子が指差して言いました。

「ホントだ。なんでだろう？」奈輔は首をかしげました。

「ねえ、ママ、パパ。どうして顔が真っ赤なの？」奈奈子が聞きま

した。

「いや。なんでもない」大輔はそういうと、向かっていきました。「奈奈はお風呂に入り、その後、寝室に向かいました。大輔はベッドの上で本を読んでいた。

「さつき。勝手に言葉がでたけど……何か細工したのか？」奈奈は大輔の隣に腰掛け、話をしました。

「あのね。今日、冴未と友里恵が家に来たの。それで、冴未が新しい薬を持ってきてね。私も試されたんだけど。で。冴未があなたに試してみたら？って言ったのよ」奈奈が大輔に言いました。

「で。試したってわけか。ま、本当のことが言えてよかったかもな」大輔の言葉に奈奈は顔が赤くなりました。

甘～い恋物語！

「私も。あなたのこと大好き！」その後、眠りに落ちる前奈奈と大輔は同じことを思っていました。

『この幸せが永遠に続きますように　そして、永遠に愛されますように……』

第二話（後書き）

またしても・・・です^^
甘くはないでしょうが、甘いと思ってください

甘～い恋物語！

第三話

「奈奈子！奈奈子！」奈奈が奈奈子を呼びました。

「なあに、ママ。あたしに御用なの？」奈奈子は部屋から首をだして言いました。

「パパにね、お弁当を渡してほしいの。ママは仕事だし。お兄ちゃんは勉強だし。あ！遅刻するわ。奈奈子、よろしくね」奈奈はそう言うと、家を出ました。

奈奈子は奈奈に渡された弁当を大輔に届けに行くため、大輔の勤めている会社へと足を進めました。

「パパの会社、遠いのよね。でも。このお弁当はきつと、ママの愛妻弁当だもの。ちゃんとパパに届けなきゃ！」奈奈子は元気に言いました。

奈奈子は電車に乗り、名古屋に向かいました。名古屋に着くと、奈奈子はいそいで大輔の会社に向かいました。

奈奈子は会社を見つけると、会社内まで走りました。

「パパ、何階だろ？」奈奈子はふとあることを考え付きました。

「ええい！全部調べちゃえ！」奈奈子は二階から調べることにしました。二階に大輔はいなく、三、四、五階にもいませんでした。

「パパ。何処なの？」奈奈子は涙目になっていました。

でも、あきらめることなく大輔を探しました。このビルは二十九階あります。

奈奈子はあることを思いだし、一階に戻りました。

「すみません。ここにお勤めの加藤大輔って何階ですか？」

「加藤さんは二十三階よ」奈奈子は再びエレベーターに乗り、二十三階に行きました。

「パパ！ママからお弁当！」奈奈子は大声で言いました。

「奈奈子、ありがとう」大輔そう言うと、奈奈子を下まで送りました。

奈奈子は大輔にお礼をいうと、再び電車で家に帰りました。

家に帰ると、奈奈が心配して居間で待っていました。奈奈子は奈奈に飛びつきました。

奈奈子は泣きながら今日の話を話しました。

「そう。それは大変だったわね」奈奈はそういうと、奈奈子の頭を優しく撫でました。

「そっか。奈奈子一人で父さんのところに行ったのか」奈輔が言いました。

「あたし、すごいでしょ！」奈奈子は奈輔に聞きました。

「ああ。すごいよ」奈輔は笑って答えました。奈輔は部屋の時計を見て、「もう、寝るか」と言いました。

「お兄ちゃん。寝る前に、あれやろうよ。魔法使いさんが教えてくれたおまじない！」

奈輔と奈奈子は心の中でこう言いました。

『この幸せが永遠に続きますように……』

第三話（後書き）

自分でもよくわからないものですが？
でも、自分のにも好きです^^

甘～い恋物語！

第四話

「ママ」。お兄ちゃんが本貸してくれないの」奈奈子が居間に入ってきました。

「あのね、奈奈子。ママ、忙しいの」奈奈が言いました。

「あたし、お兄ちゃんに貸してって言ったわ。でも、お兄ちゃんは貸してくれないのよ」奈奈子は涙目で言いました。

「何の本を貸してほしかったの？」奈奈は奈奈子に聞きました。

「ハリー・ポッターと賢者の石。今、暇だから読みたいの」奈奈子の言葉に奈奈は驚いています。

「奈奈子。ハリー・ポッターはもう少し大きくなってから読みなさい。あなたが読める本じゃないわ」奈奈は奈奈子の肩に優しく手を乗せました。

「ママだって、全部読んだことないじゃない。あたし、本大好きよ。面白いもの！ハリー・ポッターなんて、皆読んで当たり前だわ」奈奈子は必死に言いました。

「でもね、奈奈子。漢字読めるの？まだ、習ってない漢字だってあるでしょ」奈奈は奈奈子に聞きました。

「大丈夫。辞書で調べるから。貸してくれないんだったら、ママ、ハリー・ポッターと賢者の石買って」奈奈子は必死です。

「家に同じ本は二冊もいらわないわ」奈奈は優しく言いました。

「ママ、お願い！」奈奈子は両手を顔の前で合わせました。

「奈奈。買ってあげれば？」

「でも……って、なんで涙がここにいんの！」後ろから声が聞こえ、声の主は涙未だった。

「本を好きなのはいいことだぞ」涙未が言いました。

「あたし。ハリー・ポッターと賢者の石がほしいの」奈奈子は涙未に言いました。

「おい。奈奈子。ハリー・ポッターと賢者の石読み終わったから貸

してやるよ」と、そこへ奈輔が居間に入ってきました。

「本当！ありがとう、お兄ちゃん」奈奈子はさっそく部屋に戻って、本を読み出しました。

「冴末、どっから入ってきた？」奈奈は不思議そうに聞きました。

「何回も呼んだけど、でなかつたから勝手に入った」

「勝手に入るなよ」奈奈はため息をつきました。

「今日、久々に三途の川の夢見た」冴末が言いました。

「はあ？また？」奈奈があきれた声で答えました。「ああ」冴末は

スラツと言いました。

「母さん。何の話？」奈輔が奈奈と冴末の会話に入ってきました。

「夢の話。しかも、三途の川。」冴末が奈輔に言いました。「三途

の川？」奈輔は不思議そうな顔をしました。

「三途の川の向こう側を見たら、奈奈と大輔がいて、五歳の奈輔君がいた。で、ゆりっちの首と胴体が離れてた」

「首と胴体が・・・離れてた？」奈輔は頭が混乱しています。

「でさ。ゆりっちの首が俺の方に向かってくんよ。首だけ！胴体見てみると、手振ってた」冴末の話に奈輔は笑っています。

「で。ゆりっちの首と話をしている、突然ゆりっちが俺に怒鳴り声飛ばして、返ろうとしたら奈奈と大輔がキスしてた。で、そこらへんの石二つ掴んで、奈奈と大輔に命中させたら、二人ともぶっ倒れた」冴末は話しを続けました。奈輔は笑い転がっています。

「奈輔。笑いすぎ」奈奈が言いました。

「だって、面白いんだもん。おれ、魔法使いさんの話好きだな」。

「面白いもん！」奈輔がへへっと笑って言いました。

「奈輔。勉強はどうなったの？」奈奈の一言で奈輔の顔色が変わりました。

「今、やる」奈輔はそういうと、部屋に戻りました。

「奈奈におすそ分け」冴末が籠いっぱいの苺を出しました。「いいの？」奈奈が聞きました。

「ああ。俺ン家いっぱいあるからさ。昨日はゆりっちの家に届けて

きた」冴未は言いました。

「へー。食後のデザートとしてだすよ。冴未。夕食一緒にどう？」
奈奈は冴未に聞きました。

「止めとく。奈奈と大輔の甘い時間をつぶしたら可哀想だしな」

「いいから。一緒に夕食食べてよ！」奈奈の進めで冴未は、加藤家で夕食を食べることになりました。

「ただいま」大輔帰ってきました。

「お帰り」奈奈はニッコリ笑いながら言いました。

「誰か来てるのか？」

「ええ。冴未が」その後、夕食もすみ、冴未が持ってきた苺を食べることに。

「あれ。冴未、食べないの？」奈奈は冴未を見て言いました。

「家にたくさんあるから、いらない。それに……」冴未が言いかけてました。

「……！まさか、冴未！」その時、奈奈と大輔が身体ごとくつついてしまいました。

「一ヶ月、頑張れ！」冴未はそういうと、奈奈の家を出ました。

「また、はめられたわ！」

「ホントだよ。また、やられた」奈奈も大輔も同じことを思い出した。

奈奈と大輔の身体がくっついてから、三日が経ちました。大輔は会社を休み、奈奈は奈輔と奈奈子に頼ることになりました。

「冴未の薬は恐ろしい……」奈奈が大輔に言いました。

「確かに恐ろしい。だけど、少し嬉しいな」大輔は照れながら言いました。

「そうね」奈奈も続いて言いました。「ママとパパ、嬉しいんだ！」
奈奈子が言いました。

「奈奈子！」奈奈が叫びました。冴未がくっつけの魔法をかけてから、奈奈と大輔の幸せはよくなりました。

前より、いっそう素晴らしい幸せとなり、奈輔と奈奈子も大満足し

甘～い恋物語！

ていました。

加藤家はいつでも、幸せのようです。

なぜなら、皆、この幸せを望んでいたからなのですから。

『この幸せが、いつまでも永遠に続きますように……』と願って。

第四話（後書き）

最終話です。

なんか、早く終わってしまいました
残念ですよ……

甘～い恋物語！

甘～い恋物語！

PDF小説ネット発足にあたって
インターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2349a/>

甘～い恋物語！

2008年11月7日07時21分発行